
緋弾のアリア—β—

もみもみじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア―β―

【Nコード】

N3885BA

【作者名】

もみもみじ

【あらすじ】

MC、という特殊な体質を持った少女がいた。名は水戸 朱莉。仙台武偵校からやってきた、S級武偵である。彼女は自分に似た体質を持った少年を求めて東京の武偵校にやってきたのだが、当の本人はとてモネクラで……。一人の少女が介入した緋弾のアリアの二次創作。時系列は基本無視の方向で行かせてもらいます。かなめとか出したいし！まあ、ぼちぼちとやらせていただきます。

第一弾 似ゆる者（前書き）

我ながら酷いですが、私は銃に関しては詳しくはありません
なので、そんなに詳しく銃などは書けないかもしれませんが。ご了承ください
承をいただいた上で、見てください
よろしくお願いします

第一弾 似ゆる者

自分と似ている人間を知ると、誰だって会いたくなるものだ。

私はとある情報を元に、仙台の武偵校からこの学園島の武偵校へ転校することになった。

私の力に似ている武偵がいるなら、一度だけでいい、戦ってみた。感じたいのだ、その力を。

だが、

「失望した」

それが私の感想だった。

ネクラそうな外見、やる気のなさそうな目、そしてタラシというあだ名。何もかもが失望した。

しかも、そうはつきり言っただけなのに、

「それを俺に言われてもな……」

と流されてしまったのだ。

私は自分とほぼ同等の存在がいると聞いて来たのに、結果がこれだと意味がない。

私は放心状態で校舎をブラブラしていると、

「――あのバカキンジ、私が置いてあった桃まんを勝手に捨てたのよ！ 酷くない！」

「へえ」。キーくんは何で捨てたんだろうね」

知っている顔に出会った。

一人はピンク色の長いツインテールが印象的な背の小さい少女、神崎・H・アリアだ。仙台校の時に、外国に行った時に仲良くなった。

もう一人は、制服のフリフリが異常な程に印象的な金髪少女、峰理子だった。こいつとは……以前とある組織に誘われた時に知り合った。

「あつ、ミーちゃんじゃーん。おっ久し」

最初に私に気づいたのは理子だった。相変わらずハイテンションである。

「あ、ミト。お久しぶりね」

それに合わせてアリアも私に気づき、こっちを向いた。

「久しぶり、アリア、理子」

そう言つと、アリアが驚いたように理子を見た。ん、まずい事でも言つた？

「理子。なんでミトと知り合いなのよ」

ああ、なるほど。アリアは知るはずないもんな、あの組織——
「一度イ・ウーに誘ったことがあるからね」

「ブツ……。理、理子！あの組織って、そんな公にしているの！？
しかしアリアは、

「へえ、ミトを誘つたんだ」

と、平然として答えていた。あ、アリア？

「イ・ウーのこと、知ってんの！？」

つい、口から放ってしまった。しかし、アリアは、

「うん、まあ……色々あったからね」

と複雑そうに言つたので、私はそれ以上追求するのをやめた。
誰だつて触れたくない話題もあるしね。

「ていうことは、キーくと会つたんだ」

「え、ま、まあね……」

失望したけど。

ついでに情報提供者は理子だったりする。

「え、え、ミト、キンジと会つたの！？」

アリアの異常な食いつきに違和感を覚えるが、素直に頷いておく。
う。

ていうより、知り合いなのか。

「まあ、正直失望した。あんなに暗いやつとは……」

アリアはうんうんと頷くのに対して、理子はフフツツという奇妙な笑いを発している。

……少し怖い。

「あっ、あと私は探偵科だからね、アリア」
インケスタ

「えっ、強襲科じゃないの!？」
アサルト

アリアはとっても驚いていたけど、それは当然だ。なぜなら私は、元々強襲科だったからだ。やめた理由はとても簡単。

「飽きた」

だった。流石にアリアは呆氣にとられたポーズでしばらくの間、つつ立っていたので起こして、そのあと別れた。

そうか、アリアとあいつは知り合いか。となると、理子もそうなのか。

意外だった。でも、まあ、そんなに深い関係ではないだろう。

そして私は再び、校舎内をブラブラするのだった。

女子寮に戻ったあと、私はパソコンにメールが来ているのに気づいて、それを開いた。……理子からだった。

そこに書いてあったのは、テキストに近いほどの文章ばっかだったので、ごみ箱に送ろうとしたが、

「おっ？」

それには添付ファイルがついてあった。私は緊張しながら開けた。そこには、

「へえ」……」

私にとっては有益な情報を書いてあった。

第一弾 似ゆる者（後書き）

第一話を見ていただき、ありがとうございます
今後の予定ですが……

更新は、そんなに早くできないので、不定期とさせていただきます
まあ、2話までなら書けているので、早めに更新したいと思っています
ります

では、次の話でお会いできることを楽しみにさせていただきます
以上、作者でした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3885ba/>

緋弾のアリア—β—

2012年1月10日01時50分発行